

仏語表現黒人アフリカ文学管見(2)

——センベヌ・ウスマンの小説——

(承前)

恒川邦夫

4.

第三作『神の木ッ端たち』*Les bouts de bois de Dieu*⁽¹⁾の出版は1960年である。執筆時期は巻末に、著者自らの手で「マルセイユ、1957年10月～1959年2月」と記されていることから、第三作もまた第二作の上梓に引続いて、間を置かずに着手されたことがわかる。すでに述べたように、この小説は、1947年10月から翌48年3月までの6ヶ月間にわたってなされたダカール＝ニジュール鉄道⁽²⁾の黒人労働者によるストライキ闘争を主題にしている。巻頭には

君ら、^{バンテイ・マム・ヤル}神の木ッ端たち、わが組合の兄弟たち、この広大な世界のすべての組合活動家たちとその伴侶へ、この本を捧げる。

という献辞があり、その裏にはダカール＝ニジュール鉄道ストライキへの言及がエビグラフふうに記載されている。

1947年10月10日から1948年3月19日まで、よりよい生活を求めてなされたこの闘いに身を挺した男たちと女たち、彼らは誰の力にもすがらなかった。いかなる《啓蒙勢力》にも、有力者にも、代議士にも⁽³⁾。彼らがしたことは無駄ではなかった。以来、アフリカは前進している。

かくして小説は、一見、現代アフリカ労働史上に画期的な一頁を刻印したストライキ闘争の実録かと思わせる体裁のもとに始まるのであるが、読みすすむうちに、われわれはこれがほぼ完全な創作であり、作者センベヌの意図は実際のストライキの政治的展開を描くことにはなく、西欧的な意味での労働運動とは本来無縁なアフリカ民衆が、指導する活動家たちの《アジテーション》にとまどいながらも次第にストライ

キにまきこまれていき、あるときは喜劇的な、あるときは悲劇的な姿をさらけ出す様子を、温かく、しかし時に冷徹に、描くことにあることがわかってくる。従ってこの小説が前二作と明らかに違うのは、そこに小説全篇を支配するような一人の英雄的な主人公が存在するのではなく、民衆が主人公であることである。たしかに『黒人沖仲仕』のジャウ・ファラ、『おお祖国よ、わがうるわしの民よ』のウマル・ファイエと同様いくばくか作者の分身を思わせるイブライマ・バカヨコ Ibrahim Bakayoko という若い組合活動家が登場する。彼は機関士 (roulant) で、現地人の機関士の責任者であると同時に、組合員としてはスーダン〔現在のマリ〕地区の代表である。正義感の強い精力的な活動家で、当局に危険視されながら、運動の拠点をとびまわり、重要な交渉の場には必ず姿を現わし、公社側の代表とわたりあって一歩も譲らない。激情家で、無体に侮辱されると抑えられず、相手にとびかかっていく一面もあるが、集会では大衆から圧倒的な支持を得る。そうした意味で、バカヨコは英雄である。しかしそれはあくまで小説全体の中で割りふられた一つの役割としての英雄であって、全篇を支配する主人公としての英雄ではない。このことは『神の木ッ端たち』の構成の面からも明らかである。すなわち小説はダカール＝ニジェール鉄道の三大拠点であるバマコ Bamako〔マリ共和国の首都〕、チエス Thiès〔鉄道公社 Régie des chemins de fer の社屋がある〕およびダカール Dakar という三つの都市を舞台に、それぞれの都市での運動の生態——民衆の群像——を描いているのである。大きな章分けに相当する部分にそれぞれ「バマコ」「チエス」「ダカール」「バマコ」「ダカール」「チエス」と標題がつけられ、各章の小見出しに相当する部分には多く《アジビジ》《マイムナ》《色おとこのダウダ》《ウディア・ンバイエ》などといった男女の名前がつけられている。実際に登場する人物の数はそうした小見出しに掲げられた人物よりはるかに多く、読者の記憶の整理のため、フランス語版の原典では、巻頭に作者自身の手になる主要な登場人物の一覧表が付されている。

小説の展開は、すでに若い連中の先導で始まっているストライキに対して、当初は批判的であった長老や女たちが、当局の締めつけ・弾圧が強まり、ストライキ参加者に対する食糧販売のさしとめ、あるいは、市当局による水道給水の停止といった形で日常生活が圧迫されてくるに従って、団結を強め、運動を次第に大きな大衆的蜂起へと盛りあげていく過程を軸に進行する。一方、より歴史的・政治的な意味でのストライキ交渉史の方は、あくまで虚構^{フィクション}の形を借りてではあるが、チエスの鉄道公社の社屋における会社側との交渉の場面やダカールでの大集会でのバカヨコの演説などを通してうかがい知ることができる⁽⁴⁾。しかしセンベヌが実際のストライキ闘争の史実をどこまで調査し小説の中へ取り入れたのかは詳らかにしないし、そうした史実が非

常に大きなウェートを持つようにこの小説が構想されていないこともたしかであるように思われる。要はやはり、ストライキ闘争というそれまで思いもよらなかった《反抗》の形式を前にしたときに、アフリカの民衆がどのように反応するかを描くことにあったと考えるべきだろう。——そしてそこには共産主義者センベヌの多分に理想化された民衆への熱い思い入れがあることも否定できない。

わけても印象的なのは『神の木ッ端たち』に描かれる女たちの群像である。伝統的ポリガミーのイスラム教アフリカ社会における女性の位置についてここで考察する余裕はないが、人間が生き、子供を生み育てていくというもっとも基本的な人生の営みにおいて、女たちが強い力を持っていること、その強い力に逆らったり、それを無視したりしては何事も成就しないこと、これはセンベヌのアフリカ認識の重要な柱の一つであると思われる。先に、『神の木ッ端たち』が伝えてくるものはアフリカ大衆の真の息遣いであると書いたが、その意味で、以下にこの小説に描かれる女性像のいくつかを取りあげて、この小説の広がりとお行きを探ってみることにしたい。

舞台はダカール、まず登場するのは二十人もの大家族を取り仕切る年長者として、ストライキの進行とともに手に入らなくなった食糧の調達に奔走するラマトゥライエという女性である。兄のエル・ハジ・マビゲ⁽⁵⁾は区長をつとめるほどの名士だが、妹とは犬猿の仲である。このマビゲに「ヴァンドルディ」〔vendredi 金曜日の意〕と名付けられた雄の羊がいる。羊は太らせるために去勢されているが、らせん状に巻いたすばらしい角を持ちまるまる太った体でそこらじゅうを我物顔に歩きまわって、家々の穀類を食いあらし、おかみさん連中の恐怖のまよになっている⁽⁶⁾。ある日ラマトゥライエが市当局によって給水をさしとめられた給水場で、他の女たちと虚しく水の出るのを待っているところへ、乳呑児と幼ない娘が一人いる未亡人のウディア・ンバイエが息せききってやってくる。「そんなに息せききってどうしたんだい？ 気でも違ったのかい？」とラマトゥライエが声をかけると、ウディア・ンバイエは「カイエ、カイエ〔ウオロフ語で我々、うよそらよの意〕、一緒に来て、まあ見てちょうだい」と言う⁽⁷⁾。

ラマトゥライエは落ち着いた足取りで家まで戻った。しかし家に着くと同時に、目にとびこんできた光景に、怒りのあまりあやうく息がつまりそうになった。家の小さな中庭のあちこちにひょうたん⁽⁸⁾の残骸が散らばり、泥まみれの米粒や油の搾りかすが地面に点々とこぼれていた。台所では火の消えたかまどの上に鍋がひっくり返っていた。ラマトゥライエの幅広の鼻孔がふるえ、息のつまった喉からかすれ

声が出た。

—誰がやったの？

—ヴァンドルディよ、とウディア・ンバイエが言った。

—ヴァンドルディ、ヴァンドルディ。あいつはどこなの？

—さっきあんたを探しに駆け出していった時には、まだあそこにいたわよ。

その時、すぐ近くで羊の鳴き声をした。鳴き声は、まちがいなく、大庭の方から聞こえてきた。めったに走ったことのないラマトゥライエが夜叉ヤシヤのように走った。そしてヴェランダにいる羊を見つけた。羊は白いストライプ縞の入った赤い布きれを噛みながら、ピヌタ組合活動家ドゥ
シヌの第一夫人の小屋からのんびりと出て来たところだった。ラマトゥライエは腰巻を腰のまわりにしっかりと巻き直し、頭のスカーフをきつく締めた。—みんな動くんじゃないよ！、と彼女は集まってきた女や子供たちに行った。アブドゥー、大包丁を持ってきておくれ！ 急ぐんだよ！ 羊の肉になるか、このわたしの肉になるか、とにかく今夜は誰にも空き腹をかかえて寝させるようなことはしないからね！

少年がすっかり錆びて、刃のかけた古い大包丁を持ってきた。ラマトゥライエは羊をにらみつけたまま、入口の階段を降りた。羊はあいかわらず布きれを噛んでいたが、彼女の姿を見ると、二、三步後じさりし、頭を引き、あごを地面すれすれに落として、角をふり立てた。そしてあごをもぐもぐさせるのをやめると、青白い目に意地悪そうな光を浮べた。そんなふうには首をちぢめ、後ろ足を曲げた恰好はいまにも跳ねだすばかりのバネのようだった。包丁を握ったラマトゥライエはそのがっしりした首をねめつけていた。ねっとりした汗が全身に流れ、血が凍りつくような気がした。腰をつっぱり、下腹をひきしめた彼女には、神経が皮膚のすぐ下で動いているように思われた。

〔中略〕

ヴァンドルディが蹄で地面をひっかいた。それから、頭をさげて、突進した。一瞬、ラマトゥライエが刺し貫かれたかともみえた。気狂いじみた追っかけっこが始まり、ラマトゥライエと羊は隣の小屋までもつれこんで、小屋のはめ板を壊した。羊の上に半分馬乗りになったラマトゥライエは、地面にひざをついて膝行いざりながら、羊の首に両腕を巻きつけていた。羊は自分の首を締めつけるその肉のネクタイを振りほどこうと激しく頭を振り立て、その場をぐるぐるまわった。舌はだらりと垂れ、唇はまくれあがって、黄色い歯がのぞいていた。争っているうちに包丁を落としてしまっていた。ラマトゥライエ自身も身につけていた着物がほとんどすべて脱げ落

ちていた。

その裸の姿をみて、ウディア・ンバイエはあわてて子供たちを家の中に押しこんだ。猫は、背を丸め、目を細めて眼前の光景を見守っていた。そこへビスタが姿を現わした。しかし一家の最年長者が大変な恰好をして、脚を埃と血にまみれさせているのを見ると、口に手をあて《ラー、イラー、イラー》と言うだけが精一杯だった。それでも彼女はラマトゥライエの裸体に腰巻をかけてやるだけの機転がきいた。しかし、ラマトゥライエの方は、はあはあ息をはずませながら、彼女に叫ぶのだった。

—それより包丁を拾って、ビスタ！ 包丁だよ！ まっばだかだって死にゃしないさ！

ビスタは包丁を拾うと、目をまん丸くして近寄った。

—なにをぼやぼやしてるんだい？ 喉をかつ切るんだ！

命じられた通りにすると忽ち噴きでた血潮に、ビスタは一步とび退り、包丁を手にしたままその場に立ちすくんだ。

羊はびくっとふるえた。

—その包丁をこっちにおくれ、ビスタ！ そう言って、ラマトゥライエは呼んだ。アブドゥー、アブドゥー！

ウディア・ンバイエが母屋の戸口を開き、アブドゥーが駆け出してくるのが見えた。

—^{あし}肢をおさえてるんだよ、と羊の上に馬乗りになったラマトゥライエが言った。それから包丁を羊の首に続けざまに三度つきたてた。再び血が迸り出た。ぶるぶる震えていたビスタの大きな顔に血が噴きかかった。ラマトゥライエは羊の分厚い毛に包丁をこすりつけ、血をぬぐって、立ち上った。彼女の目には誇らしさも傲慢さもなかった。ただ自分は運命によって命じられたままに務めを果したにすぎないという一種の満足感だけがあった。その時になって彼女は自分が血を流していることに気づいて、母屋に入っていった⁽⁹⁾。

この《事件》は、このあとヴァンドルディの所有者マビゲが警察に訴え出たため、警官隊がラマトゥライエを引っ立てに来るという局面をむかえて一挙にエスカレートする。まずはラマトゥライエの家の大庭で警官隊を指揮するフランス人と通訳を介しての押問答となり、増援隊がかけつけるうちに、集まってきた女たちと警官隊の間に乱闘が始まる。一方、組合活動家ドゥンヌの第二夫人マム・ソフィは一団の女たちを

連れて、マビゲの家に向い、「マビゲ、出てこい！ 男なら、出てこい！ おまえはトッパブ〔白人〕のかげに隠れてしか勇気が出ないのか！ おまえは水道を止めさせただろう、こんどはこのわたしの口をふさがせてみるがいい！⁽¹⁰⁾」と勇ましく呼ばわって、女たちを指揮し、台所からキビを《掠奪》して引きあげる。しかし、意気揚揚と《遠征》からンディアアイエースの大庭〔ラマトゥライエの取り仕切る家の大庭〕に戻ってきたマム・ソフィたちが、いざ掠奪品の分配に取りかかろうとしたとき、騎兵隊がやってくる。それは先の警官隊の増援部隊として遅ればせながら到着した騎兵一個小隊である。色めき立った女たちは、夜の帳が落ちたのを幸いに、わらの束に火をつけたのやかまどの燵をいれた鍋を馬にぶつけ、騎兵を落馬させて抵抗する。その騒ぎはやがて一帯の火事に進展し、燃え広がる火はついにマビゲの家に燃え移り、焼き尽した。しかし事はそれだけでは治まらず、翌日ンディアアイエースは憲兵隊の応援を得た警官たちに再び包囲され、ラマトゥライエはこれ以上の騒ぎになるのを恐れて警察に連行されることを承諾する。ラマトゥライエが警察署長と憲兵隊長につきそわれて歩き出すと、そのあとに女たちの長い列ができ、その列は町の角々で新たな一団を加えてふくれあがっていった。かくしてメディナ〔ダカールの原住民族の居住地区の名称〕の警察署の建物の中へラマトゥライエがフランス語を解する姪に伴われて姿を消すと、建物の前の広場には黒山の人だかりができる。警察署長は内心ジレンマに苦しんでいる。へたにラマトゥライエを牢屋にぶちこめば、メディナは暴動の巷と化しかねない。かといって、このまま釈放すれば警察の面目は丸つぶれだし、このことが悪しき前例となってまた今度のような不祥事が起るかもしれない。結局、警察は消防車二台による放水で群集を散開させるという強硬手段を取る一方で、ダカールのイスラム教徒の頂点に立つ導師セリーニュ・ンダカールの取りなしによって一件を落ち着させ、群衆を説得懐柔しようとする。消防車の放水によって一時はひるんだ群衆が、前列にいたウディア・ンバイエが倒れるのを見て、再び隊を組みなおし消防車にせまったため、生命の危険を感じた消防夫たちは逃げだしてしまう。しかし倒れたウディア・ンバイエ——そもそもラマトゥライエに最初にヴァンドルディの仕業を告げにきた二人の子持の未亡人——は、声を立てようとしてあけた口へホースの水が直撃し、喉の軟骨を折って絶息していた⁽¹¹⁾。そこへセリーニュ・ンダカールがマビゲを伴って姿を現わす。「女たちよ」と彼は威厳にみちた声で言う。「これがおまえたちの仕出かしたことの結末だ！ ここ暫く、おまえたちはまるで無神論者のごとく振舞っている。平和な民の住居に火を放つのみならず、法の執行まで妨げている。この母親の死の責任はおまえたちにある。いずれアラーの前で責任を取ることになるだろう。〔中略〕わたしはこれからラマトゥライエと、神に感謝あれ、

トッパブたちに会いに行く。わたしの取りなしがなければ、おまえたちはみんな投獄されるだろう。わたしの頼みをききいれて、エル・ハジ・マビゲは告訴を取り下げた。だからもう大人しくするがよい。わたしが警察署から戻ってくるときには、もう一人もここに残っていないようにしてほしい。そうでなければ、わたしもこれ以上とりなしはできないだろう。(12) このあと、ストライキは幾人かの異教徒の煽動によるものだから、これ以上惑わされないように心せよ、神はわれわれをフランスのトッパブと共存させて下さっている、なにごととも神の御心にそむいてはならぬ、と言いのこして、セリーニュは警察署の中に姿を消す。警察署の中ではマビゲとラマトゥライエがにらみ合うが、マビゲが告訴を取り下げた以上、ラマトゥライエは釈放ということになる。セリーニュは、しかし、ラマトゥライエに一言マビゲに対してわびを入れさせようとする。一言謝罪すればすべて事がすむという瀬戸際まできて、思わず「叔母さん、言う通りにして」と口を添える姪に、手の甲で力一杯平手打ちをくわせたラマトゥライエは、

立つんだよ、ンデイエ・トッティ [名⁹]、こんな手荒な真似はしたくなかったよ。だけどさっきから口を出すんじゃないと言っておいただろう！ わたしゃ、こんな薄汚ない奴に口をきくくらいなら、火事で焼け死ぬか、八ツ裂きにされた方がいいんだ。こいつのヴァンドルディにやったことぐらいのことは、いつだってまたやるつもりだよ。こんな奴らは親類でも友達でもありゃしない。こいつらは勲章を貰うためだったら、トッパブの尻だってなめるような連中なんだ。そのぐらいのことはみんな知ってるんだ。さあ泣くんじゃない、立って、いくよ。こんな奴らの顔はもう見あきたよ(13)。

と言い、姪の手を取って憤然として出て行く。

ストライキ闘争の中心的拠点であるチエスにはマイムナとペンダという二人の女性がいる。マイムナはめくらであり、誰にも父親の分らない乳呑児の双子をかかえて、市場から少し離れた機関庫の裏で労働者相手におかゆの店を出している寡婦ディエナバの世話になって暮している。

マイムナはめくらではあったが、憐れっぽくはなかった。それどころか、夜の女神のように、頭を高くあげ、人々の頭上を越え、世界のかなたを見つめているような虚ろな目をして、真黒な肌の堂々たる体軀を運んでいた。〔中略〕彼女がめくら

であること以外、誰も彼女のことについてはなにも知らなかったが、その声はみんなから愛されていた。一日中、彼女は朗唱していた。人々はその声を聞くためにしばしば立ちどまった。そのときも、彼女は《グンバ・ンディアイエ》の伝説を歌っていた。それは盲^{めし}いる前に男たちと力を競った女の伝説だった⁽¹⁴⁾。

一方、ペンダは女たちから《娼婦》とあだ名されている。好きな男ができると、後を追って暫く共に生活し、また古巣に舞い戻ってくるような女だと思われていた。

彼女はごく若い頃から独立心が強く、それは年と共にますます募っていた。娘の頃は、男嫌いだったようで、求婚してくるどんな男もみんなつっぱねていた⁽¹⁵⁾。

そして実母が死ぬと、父親の第二夫人であったディエナバの養女となった。そのペンダがある日、例のごとく何日か留守にした後で小屋に戻ると、中にマイムナがいた。留守のあいだはペンダの小屋に住むといい、とディエナバに言われてのことだったが、ペンダは自分になんのことわりもなく事がなされたことに不満な面持であった。しかし乳呑児をかかえた無防備な盲目のマイムナに同情したのか、ペンダは「乞食と不潔な人間だけは御免だよ」と釘をさすと、彼女が自分の小屋で共同生活することを認めた。ある晩ペンダがマイムナに、おまえの双子の父親は誰なんだい、と訊く。マイムナは黙っている。ペンダが言った。

——いまにわかるさ！ そしてつけ加えた。

——男なんてみんな犬畜生だ！

マイムナは話題の矛先が変ってほっとしたので答えた

——みんながみんなそうだとは思わないわ。

——もしあんたに男たちが用を足したあとの顔が目に見えたら、どういうものか納得がいくだろうに⁽¹⁶⁾。

このペンダが、どうしてこんなことに関わるようになってしまったのか自分でもはっきりわからぬままに、ストライキの支援活動に手を貸し始める。チエスの鉄道公社で組合の代表と会社側の交渉が決裂し、アリ・ヌゲール広場に集まった群衆の前にバカヨコが「全面的勝利を勝ち取るまでストライキを続ける」と宣言したとき、ペンダは女たちを代表して発言を求める。彼女の発言の骨子は数日後にンダカルー〔^{ダカールの呼称}〕で開かれる予定の大集会へ結集するため、「妊婦と乳呑児をかかえた者と年寄りを除いた」すべてのチエスの女があすからダカールへ向って行進を始めるというものだ

った⁽¹⁷⁾。70キロもある炎天下の道のりを⁽¹⁸⁾歩き通すということは、壮挙ではあるが、危険でもあり、反対の声もあがった。結局、男たちが数名護衛につくという条件で、《女たちの行進》は決行ということになった。はじめ女たちは歌を歌いながら進んでいった。乾季の太陽は容赦なく降り注いだ。最初の二日間は行きついた村々で歓迎を受けながら、歌声も途絶えず、何事もなく過ぎた。しかし三日目の昼ごろになると、疲労が目立ち始め、行列はだらだらと長くなった。先頭グループを一緒に歩いているマイムナがペンダに「もう歌声が聞こえないよ」と注意を喚起する。ペンダは長い行列を逆にたどって、落伍者たちに声をかけながら、後れた女たちのかたまっているところまで戻る。そこには百人ばかりの女たちが腰巻や胴着を木の枝にかけて日陰を作り、座ったり、寝ころんだりしていた。「さあ、歩くんだよ」とペンダが声をかけても、みんな起き上ろうとしない。のみならず、そこにいた職工長の妻アワは、日頃ペンダを「ピティン、ピティン」(putain「娼婦」の訛り)と呼んで軽蔑しているので、口汚なくつかかってくる。

——わたしはここにいるよ。わたしたちにはペンダの命令になんか従う必要はないんだ。だいたい、この女は子供が産めないのさ。男たちがこの女の尻を追いまわすのはそのせいさ！ それにこの女の仲間にはドゥーム〔悪霊〕がとり憑いてるんだよ！ この女はそんな連中とわたしたちを一緒にしようとしてるんだ！ この売女め！

もはや怒りを抑えきれなくなっていたペンダは、三跳びで土手の上に向けあがった。そして足で木の枝をひっくり返し、女たちが抗議の叫びをあげるのを尻目に、かけてあった腰巻や胴着をはぎとった。

——ピティンにわたしの腰巻なんかさわらせないぞ！ とアワが喚びた。

しかしペンダはその俄づくりの日裂いをひとつ残らずはぎとるまでやめなかった。それでもなお、幾人かの女たちが寝ころがったり、うずくまったりしていたので、こんどは、一本一本指を立てながら、女たちの数をかぞえ始めた。

——一人、二人、三人、四人……

——おまえにそんなことをする権利はないよ、この魔女めが！ とアワが叫んだ。

——ごしょうだから、数えないでおくれ、とセニが、あわてて立ち上って、言った。わたしたちは神様の木ッ端なんだよ、そんなことをしたら死んでしまうよ！

——わたしはあんたたちがどのくらいストライキに反対しているか知りたいのさ、とペンダは言った。……五人、六人、七人、八人……

——やめるんだ、おまえはわたしたちを生の^{なま}のまま喰り喰う気か！

アワも立ち上った。

——まったくわたしの見た夢は本当だったんだ。とがった刀を持った亡者たちがわたしを切り刻んで食べにくる夢を見たんだ！

怒りと恐怖に心を奪われた女たちは、腰巻を拾い集め、頭に巻いた布を締め直して、街道に戻り、再び歩きだした⁽¹⁹⁾。

《女たちの行進》は『神の木ッ端たち』全篇の中でも特に傑出した場面であると思われる。新しい社会、新しい未来の建設に向って大衆プロレタリアートが一步前進するという小説全体の明らかに社会主義レアリズム的構想の枠の中で発想されながら、そこにはアフリカの自然と神話と民衆の渾然と一体になった現実が、その独得のリズム感と共に、描き尽されている。行進の行く手には果しなく続く灼熱の白い路があり、ひきつけを起すものもあれば、ドゥームがとり憑いていると騒がれてみんなから袋たたきにされる女もでる。定められた場所での午睡のあと、ようやく力を回復し、隊列を整えて再び歩き始めた一行は、程なく、つむじ風に襲われる。疲れきった女たちの上に夕闇がおりてくるころ、一行はダカールまであと二行程というところにあるセビクタンの村からの出迎えの人々に出会う。夜は村人から盛大な歓迎を受け、村の広場は屠^{はぶ}られた羊の血で真赤に染まるほどだった……。

どこか神秘的で、ある意味でもっとも強烈なアフリカの存在感を感じさせるめくらのマイムナが口を開くのもこの行進のさなかにおいてである。マイムナはすでに双子のうちの一人を、チェスの騒動の雑踏の中で死なせてしまっていた。いまや一人残った子供をかかえて、行進の先頭を黙々と歩いている。彼女はペンダの情熱の源にバカヨコがいることを見抜いていた。

——ペンダ、もしかしたらあんたの心の中には一人の人間しか受けいれる余地がなく、そこを占領してまったのが、バカヨコなんじゃないの？

二人はまわりの女たちを起きないように低い声でしゃべっていた。マイムナが続けた。

——あの人はあんたの心を横切って、結局、苦しみしか残していかないんだ。あの人はなんでも壊してしまう人なんだ。ねえ、わたしたち女は、相手の男についても知らないときに、その男が好きになるんだよ。その男の秘密が知りたいと思うんだ。だから、そうして自分が選んだ男がわたしたちを邪慳に扱ったり、無慈悲な仕打ちをしても、男のあとを追いかけるんだ。ところが男の秘密をとことん知って

しまつて、あとにはもうなにもない、わからないことなんて一つもないってところまでくると、あきるんだね。だけどバカヨコみたいな連中は、わたしたちには毒だね。ああいう連中はわたしたちを好きなようにしてしまうからね。あんただって《い^いや》というまもないうちに、もう《は^いい》って言ってしまってるんだから⁽²⁰⁾。

このあとで、ベンダが例のごとく「ところであんたの子供の父親は誰なの」と訊く。すると思いがけずマイムナが答える。

— あんたもしつこいね。そんなことはもう大したことじゃないよ。男は別にわたしをだましたわけじゃない。その男はわたしを所有したと思っただけだし、それは違うね。男が所有したのはわたしの体さ。わたしの体だって、あんたの体と同様、欲望があったからね。男がわたしを棄てるだろうってことはわかっていたよ。わたしの方は頭の中でとくに男を棄ててしまっていたのさ。もうすぐダカールに着くね。そうしたらわたしはそこで暮らすつもりだよ。乞食をしている兄弟と子供とで暮らしていくつもりだ。子供はわたしのものだからね。だってそうだろう、ベンダ、子供は父親が誰だか知らないってことはあっても、9ヶ月もお腹の中にいた母親のことを疑う子供なんかいるだろうか？⁽²¹⁾

しかしマイムナの子供の父親はすぐ近くにいた。チェスの組合活動家で《行進》の護衛の一人としてついてきたサンバ・ンドゥルグー⁽²²⁾である。女たちの行進がいよいよ終りに近づき、ダカールの大集会の会場となる競馬場まであと500メートルというところまで来たとき、突然赤い帽子の狙撃兵たちが姿を現わす。それより早く、市の入口に兵隊がいるというニュースが流されていて、ベンダから少し後れて歩いていたマイムナのところへサンバ・ンドゥルグーが近付いてきて、腕を取った。マイムナはサンバが子供の父親であることを知っている。

— 誰なの？

— おれだよ。

— あんた、サンバ？ どうしたの？

— 兵隊がいるんだ。

— 聞いたよ。

サンバ・ンドゥルグーはどのようにしてこの女、かつての夜、自らの欲望のはけ口にしたこの女のところへやって来たのかよくわからなかった。それはかたわ者に対する憐みだったのか、それとも人の子の母親に対する、あるいは、子供に対する憐みだ

ったのか？ 彼はいまさらのごとく、彼女が日ましに大きくなっていくお腹をかかえて炎天下で働いている姿を目にしては、何ヶ月もの間、恥じ入っていたことを思い起していた。彼女に自分だと気づかれないためにどんなふうにして作り声をしてきたかということも思い起された。

—子供をこっちにわたしてくれ、と彼は言った。兵隊を避けるのにはおれの方がやりやすいだろう。

—あんたは自分の子が欲しいの？ とマイムナが言った。

—兵隊がもうじきそこまでやって来るんだ……

—それで？……母親のお腹が大きいときに父親が死ぬことだってあるわ。それだって子供はちゃんと生きていくよ。母親がいるんだから。この子だって同じさ。この子はわたしが守るよ。さあもう行っておくれ。ンダカルーに着いたら、もうわたしに会いに来てはいけないよ。わたしはあんたの姿を一度も見ることがない。この子の父親が誰だか知っている者も一人もいない。だからあんたは面目を失わずに安心して眠れるよ。さあ男たちのところへ行っておくれ⁽²³⁾。

こうした会話が交された直後、狙撃兵を率いた隊長の制止を無視して、強行突破しようとした一行は、あわてた狙撃兵の発砲で前列にいた二人を失った。倒れたのは行進の女指揮者ベンダとサンバ・ンドゥルグーである。

ラマトゥライエといい、ベンダやマイムナといい、いずれも伝統的なアフリカ社会の中にしっかりと根を下した女たちである。しかし、より若い世代の女の中には、教育を受け、ヨーロッパの《文明》に目を開かれるが、そのことによってかえって現実のアフリカとうまく折合いがつかず、周囲の者たちに対する優越感と自国の野蛮さに対する劣等感に引き裂かれ、不毛な孤立状態に陥る者がある。少し距離を置いて眺めれば、他愛のない青春の蹉跎にすぎないようにもみえるが、教育が、就中、白人文化の鼓吹を原則とした教育がしばしば社会的栄達の切り札となり、《野蛮状態》から《文明》へ脱却するためのスプリングボードとなると思われている社会で、中途半端に教育を受けた者がえてして陥る袋小路を、独学者を自認するセンベヌは屢々辛辣なアイロニーをこめて描出する。『神の木ッ端たち』の中ではラマトゥライエの姪ンデイエ・トゥッティの場合がその例である。

ンデイエ・トゥッティはストライキが始まる以前は女子師範学校に通っていた。彼女がフランス語を理解し、読みかつ書くということは、それだけで、彼女を周囲の世界

から孤立させていたが、さらに彼女が書物や映画を通して覗きみる《文明世界》は、否が応でも、「一足ごとに癡病みだの、びっこだの、うらなりだのにぶつかる」彼女の住む世界の《文明の欠如》に目を開かせ、彼女の心は「恥ずかしさと憤りでかきむしられるのだった⁽²⁴⁾。」

実際、ンデイエ・トゥッティはアフリカよりもヨーロッパのことをよく知っていた。だからこそ、学校に通っていたころ、彼女は地理で何度も賞を貰ったのだ。しかし、アフリカ人の書いた本は一度も読んだことがなかった。そんなものを読んでも何も得るところがないと、はじめから思い込んでいたのだ⁽²⁵⁾。

このンデイエ・トゥッティがバカヨコに対して恋心を抱いている。しかしバカヨコにはすでにアシタンという妻がいる。その男の妻になりたいと思えば、第二夫人になることがさしずめ伝統的に許容される一つの道であるが、一夫多妻制に対して、ンデイエ自身がアフリカの悪しき慣習として——「こういう結婚には愛が、少くとも自分が考えているような愛が排除されている⁽²⁶⁾」——否定的である。ンデイエをとりまく求愛者の一人、《色おとこ》の異名をとるダウダに打ち明ける彼女の言葉は、この点について、はっきり断定的である。

——あの人に対するわたしの気持には、わたしも確信が持てないわ。でも一つだけはっきりしていることは、わたしが自分の夫を他のどんな女とも共有する気はないってことよ！⁽²⁷⁾

小説の終局近い山場「ダカール大集会」のあと、海辺でンデイエはバカヨコと会う。その夜の帰り路での会話。

——どうしてペンダのことをわたしに話してくれないの？

——彼女は死んだんだ、知ってるね？

——知ってるわ。あなたは彼女のことをよく知ってたの？

——知っていたよ。どうしてそんなことを訊くんだ？

——彼女は娼婦だったのよ。

——誰がそんなことを言ったんだ？

——家の女たちはみんな知ってるわ。あの女の上に乗らなかったのは鉄道だけだって言ってるわ。わからないのよ、一体どうして……

ンデイエ・トゥッティは最後まで言わなかった。バカヨコもすぐには答えなかった。

—おまえは恐らくベンダの足もとにも及ばないよ、とようやく彼は言った。おれには彼女の価値がわかる。彼女は本当の友だちだったし、自分の命を捧げたのだ。

〔中略〕

—聞いて欲しいことがあるの、言ってもいいかしら？ とンデイエが言った。

……わたしあなたの二番目の奥さんになりたいの。

—なんだって？

バカヨコは頭をがーんとやられたみたいに、その場にぴたりととまった。

—この問題については、ずいぶん考えてみたわ。あなたが断わるとしたら、それはあなたがこれまで一夫多妻制に対して公然と反対の立場を表明してきた以上、いまさら前言を翻すのは難しいからだと考えたりしたわ。でもあなたが心から反対していることはわかっているの。わたしだってそうだったの。一夫多妻制というのはわたしにはどうしても理解できないものだったし、憎んでさえたわ。でも、そのうち、おぞましく思っていた筈のものが好ましく思えるようになってきたの……というか、少くとも、イスラム教徒に生まれたからには、宗教ではわたしにもそれが許されていると言えるということね。あなたもいつか言ったわね。こういう古い封建的な習慣は、アフリカが独立し、革新されるまでは消えないだろうって。そういうよりよい時代が来るのを待ちながら、わたしはあなたの第二夫人になりたいの。《開化民^{リニエ}(28)》の女性にもそうしている人を一人知っているわ。どうしてわたしがそうしてはいけないの？……アシタンに嫉妬なんかしないわ。

〔中略〕

—いい？ と彼女は訊いた。

—だめだ⁽²⁹⁾。

*

『神の木ッ端たち』は複眼的構造を持った作品である。底辺の民衆の意識のめざめとエネルギーの結集によって、アフリカの新生の一頁が記されていくという信念が全篇を貫いていることは否めないが、それはあくまで現実の民衆の運動を大きく方向づけている力線としてであって、個々の人物が描く枝線はいささかも捨棄されることなく、いたるところに根茎を作り、ふくらみを作っている。そのことはラマトッライエ、マイムナ、ベンダ、ンデイエといった女たちの現実に生きる姿が、ストライキ闘争という新たな時代の局面に対して、必ずしも整合せず、さまざまな屈折・挫折を露呈し

ていることからもうかがわれる。ここに描かれる人物たちは、すべて、いわば開かれた存在としてある。背後から彼らを包みこむように野太く未来への力線が引かれているにも拘らず、彼らはけして類型化され得ない存在であり、一人一人が自らの生きる世界の革新に加担する正のベクトルとともに、ともすれば失速・失墜の引き金になりかねない、負のベクトルを背負っている。そこに作家センベヌの視線の成熟がみられ、そうした成熟なしには民衆をこのように生き生きと描くことはできなかったであろう。

センベヌはこの小説を1960年に発表すると、12年振りに祖国へ戻る。セネガルはその年、前年結成したマリ連邦から脱退して、レオポール・セダール・サンゴールを初代大統領に独立共和国としてスタートした。1960年はアフリカの独立ラッシュの年である。祖国で実際にアフリカが変りつつあるのを肌で感じ取った彼はマリ、ニジェール、象牙海岸、コンゴとアフリカ大陸を旅行して歩く。この旅行はセンベヌに多くの示唆を与えたと思われるが、ポーラン・スマヌー・ヴィエイラによれば、それは何よりも、アフリカの大衆に文字を媒介にして語りかけようとしてもかなわないという実感であった。

アフリカ人の文学者や文化人がアフリカについての迷蒙を打破し、アフリカの個性を顕揚しようとしてなした仕事や独立闘争のためになした仕事は大衆にはほとんど理解されていなかった。そしてアフリカ小説の読者はヨーロッパ人であるという否定し難い事実があった。それに対して、彼は、毎晩、映画館へおしかける沢山の人々を見た。そこから彼は悟ったのである。今のアフリカで大衆に語りかける最良の方法はやはり映画なのだ⁽³⁰⁾。

かくして彼は1961年、パリに戻ると映画評論家ジョルジュ・サドゥールに助言を求め、映画監督のルイ・ダカンに紹介される。そしてルイ・ダカンの助言により、映画作りの基礎技術を身につけるための奨学生を受入れてくれる国を求めてソヴィエト、カナダ、アメリカ、ポーランド、チェコスロヴァキアなどに手紙を書く。そして最初に返事がきたのがソヴィエトだった。1961年の中途から1962年まで、センベヌはモスクワのゴリキー映画研究所でドンスコイ、ゲラシモフといったすぐれた映画人のもとで映画作りの勉強をする⁽³¹⁾。それが今日の大をなした映画監督センベヌの出発点である。

本稿ではセンベヌの映画作品にまで筆をすすめることはできないが、センベヌ

における小説家から映画作家への転換は——といってもセンペーヌは小説家としての筆を折ってしまったわけではない⁽³²⁾——センペーヌの確固としたアフリカへの、それもアフリカ民衆への回帰と軌を一にしているのであって、いかなる意味でも、断絶や方向転換を意味するものではない。そのことは、彼がその後作ったすぐれた映画の多くが、彼の小説に題材を取ったものであることからわかるが、彼にとって民衆は描く対象であるばかりでなく、メッセージの第一の受け手でもある以上、そのために最も有効なメディアを選んだということに他ならない。またアフリカへの、アフリカ民衆への回帰は彼の三篇の小説において次第に顕著になってくる傾向でもある。西歐的な心理主義、観念主義を排し、平明で生き生きした現実を、土塊^{つちくれ}のついた根をつけたままイメージ化して提示するという、したたかなリアリズムの感覚はそこから生まれたのであり、『神の木ッ端たち』はその具体的な成果であり、一つの到達点であると同時に、期せずして、未来のすぐれた映像作家を予告するもののように思われる⁽³³⁾。

1984年3月岩波ホールで彼の長篇映画『エミタイ』が上映されるのを機に、国際交流基金の招きで、センペーヌ・ウスマンは来日した。若い頃の写真にみられる精悍な風貌の面影を残すこの中肉中背の監督は、3月になっても雪が時折ちらつく例年になく寒い日本の春にとまどいながら（寒いのが大の苦手だということであった）、とても61歳とは思えないほど精力的に記者会見、講演会、新聞、雑誌のインタビュー、テレビ対談など過密な日程をこなしたが、日本の作家たちとの非公開の談話会で、来日の直前にこの『神の木ッ端たち』をフランス語とウォロフ語の二通りの脚本による芝居に仕立て、上演したことを報告している⁽³⁴⁾。また滞在中、何度か親しく接する機会を得た筆者に、帰国前、署名入りで贈ってくれたのもこの『神の木ッ端たち』であったことを思うと、この作品に対する作者の並々ならぬ愛着のほどがしのばれる。

注

本稿は増谷外世嗣教授追悼論集『言語と文学』所収の「伝語表現黒人アフリカ文学管見（2）—センペーヌ・ウスマンの小説」の続稿である。

1. 1960年にル・リーヴル・コンタンポラン社（Le Livre Contemporain）から刊行される。現在流布している版は *Les bouts de bois de Dieu*, Presses Pocket, 1971. 引用はすべてこの版による。

なお藤井一行氏による邦訳（『神の森の木々』、新日本出版社、1972）がある。訳者あとがきによれば「フランス語の原著を底本としたが、訳者の語学力の関係からロシア語版（ガリンスカヤ、グラエフスカヤ共訳、1962年モスクワ）を参考にするとともに訳稿については〔世

界革命文学選] 編集委員会の校閲を仰いだ。」本稿の引用はすべてフランス語の原典から筆者が直接訳したものであるが、翻訳に際しては藤井氏訳を参考にさせていただいたことをお断りしておく。

また藤井氏も指摘しておられることであるが、原著の題名 *Les bouts de bois de Dieu* にある *bout de bois* とは「木切れ、木ッ端」の意である。そして Presses Pocket 版 p. 77 の原注に次のような記述がある。「迷信によれば、生きている人間を数える場合には一人、二人と数えずに、一《木切れ》、二《木切れ》というふうには数えないと、数えられた人間の寿命が縮まると信じられている」。従って藤井氏訳の『神の森の木々』は意識であるが、*bois* には森の意味もあるところから誤訳と受け取られる恐れがあるとともに、原著には副題として「神の木ッ端たち」を意味するウォロフ語「バンティ・マム・ヤル」(*Banty Mam Yall*) が添えられていることを考え、拙稿では『神の木ッ端たち』とした。

2. ダカール=ニジュール鉄道は全長 1288 km に及ぶ。
3. セネガルはフランスの古い植民地で、とくにサン＝ルイ、ダカール、リュフィスク、ゴレの四都市は別格で、その都市の住民は選挙権、被選挙権などの政治的権利の行使を含めて本国なみのフランス市民権を享受する特権を有した。1914 年には本国国会へ初の黒人国民議会議員 (ブレーズ・ディア＝ニュ Blaise Diagne) を選出している。ここで代議士とはそうした議員たちを指している。有力者 (*notable*) は伝統的なイスラムの導師や富裕な商人、《啓蒙勢力》(*mission civilisatrice*) はカトリックの伝道会・布教団などを指すものと考えられる。
4. 本稿ではストライキの政治的スローガン・要求事項などについては特に取り上げないが、小説から読み取れる限りでは、「[20% の] 賃上げ、年次休暇、退職金・家族手当の支給」(cf *Les bouts de bois de Dieu*, pp. 278-280) 「[機関士に] 助手 [をつけること]、自分たちの組合を持つ権利」などを要求しての闘いであった。特に家族手当については、一夫多妻制 (*polygamie*) をめぐって双方の議論が沸騰する。チェスでの交渉の席における、鉄道員連合 (*Fédération des cheminots*) の第二書記ラビブの次のような発言に組合側の主張がよく集約されているように思われる。「ポリガミーはたしかにわれわれの側の問題かもしれない。しかしあなた方は、必要だとなれば、それを利用することに躊躇しないじゃありませんか！ たえば、原地の若者を徴用するときには、彼らが重婚の父親の子かどうかなんて訊きもしないでしょう！ この鉄道だって、[あなた方の言う] 妾の子たちの手で作られたんですよ……」(*ibid.*, p. 280)
5. エル・ハジ El Hadji はメッカに詣でた者に対して与えられる称号である。
6. *Les bouts de bois de Dieu*, pp. 81-82.
7. *Ibid.*, p. 112.
8. 「ひょうたん *calebasse*」は大きなクルージュの実の中味を抜いて干したもの (容器として使う)。
9. *Les bouts de bois de Dieu*, pp. 113-115.
10. *Ibid.*, p. 176.
11. *Ibid.*, pp. 193-194.
12. *Ibid.*, p. 195.
13. *Ibid.*, p. 198.
14. *Ibid.*, p. 40.
15. *Ibid.*, p. 218.
16. *Ibid.*, p. 222.

17. *Ibid.*, p. 289.

18. 小説中にダカール-チエス間の距離は書かれていないが、*Dakar et le Sénégal, Les Guides Bleus illustrés*, Librairie Hachette, 1972 によれば 70 km である。

19. *Les bouts de bois de Dieu*, pp. 301-302. このシーンの理解の為には注 1 参照。

20. *Ibid.*, p. 304.

21. *Ibid.*, p. 305.

22. サンバ・ンドゥルグーは小説の始めの方に、チエスの活動家の一人として登場する。「踏み切りのところで、鍛鉄工のブバカルが立ち止まった。——おい、と彼は言った。《機関庫新聞》が来たぞ！

サンバ・ンドゥルグーは、まさに歩く新聞のような男だったので、そんな異名を取っていたが、いままさに一群の労働者の先頭に立ってやってきた。彼はおかしな男だった。その姿を一目見ただけで、誰でも笑わずにはいられなかった。古いアメリカ製のカーキ色の服を着ていたがシャツはズボンの上に垂れ下り、ズボンはサマラ〔サンダル〕の上に皺くちゃになっておおいかさびていた。そしてひさしの破れたカスケットをたえずじくりまわしていた。」(*Ibid.*, p. 37.)

23. *Ibid.*, pp. 312-313.

24. *Ibid.*, p. 100.

25. *Ibid.*, p. 101.

26. *Ibid.*, p. 101.

27. *Ibid.*, p. 106.

28. 要するに《野蛮状態》から《文明》へと脱却した者を指す言葉だが、その判断基準があくまで西欧文化・文明の諸価値を正と考えての上である以上、明らかに差別語である。

29. *Les bouts de bois de Dieu*, pp. 342-344.

30. Paulin Soumanou Vieyra, *Sembène Ousmane Cinéaste*, Ed. Présence Africaine, 1972, pp. 20-21.

なお 1984 年に来日した際、高野悦子のインタビューに答えて、センベヌ監督は次のように語っている。「わたしは『黒人沖仲仕』の一冊目を母に捧げました。母は、本の表紙を手でなでて喜んでくれましたが、その時、母を代表するわたしの祖国の同胞たち、わたしをもっともわたしの本を読んでもらいたいと思っている人々が文盲であることに思いあたりました。わたしの思いをそうした人たちに知ってもらうには、どうしてもわかりやすい方法を見つけなければなりません。わたしは大衆に人気のある映画に興味を抱きました。」(『エミタイのウスマン・センベヌ監督に聞く』、キネマ旬報、1984 年 4 月上旬号、91 頁、岩波律子訳)

32. 1960 年『神の木っ端たち』執筆以降のセンベヌの小説作品は以下の通りである。

1962 年 短編集『上ボルタ』*Voltaïque*, Présence Africaine.

1964 年長篇小説『アルマタン』*L'Harmattan*, Présence Africaine. (これは三部作として構想された小説の第 1 部で、副題に「レフェランダム (国民投票)」とタイトルがつけられている。レフェランダムとは第 5 共和制の発足に先立ってド・ゴールが行なった 1958 年 9 月 28 日のレフェランダムのことである。第 2 部は 1958-1963, 第 3 部が以後今日までという壮大な構想の長篇小説であるが、刊行されたのはまだ第 1 部のみで、第 2 部は「理想を共にする伴侶たち」というタイトルのみが発表されている。)

1966年 中篇小説2篇『ヴェイ・チオザーヌ (白い起源)』*Véhi Ciosane* および『郵便為替』*Le Mandat, Présence Africaine*.

1975年 中篇小説『不能』*Xala, Présence Africaine*.

1981年 長篇小説 (2巻本)『帝国の末裔』*Le Dernier de l'Empire, Editions l'Harmattan*.

33. センベール監督の映画作品は以下の通り。

1963年 『ボロム・サレット』*Borom Sarret*.

1964年 『ニアイエ』*Niaye*. (小説『ヴェイ・チオザーヌ』の映画化)

1966年 『…の黒人女』*La Noire de …*. (短篇集『上ヴォルタ』所収の同名短篇小説の映画化)

1968年 『郵便為替』*Mandabi*. (同名の中篇小説の映画化。マンダビは *mandat* に相当するウォロフ語)

1971年 『タウ』*Taw*.

1971年 『エミタイ (雷神)』*Emitai*.

1974年 『不能』*Xala*. (同名の中篇小説の映画化)

1976年 『チェド』*Ceddo*.

なお次回作として19世紀に西アフリカを統一したサモリ・トゥーレ王の生涯を描く2部構成6時間の長篇が予告されている。

34. 岩波ホールの岩波律子さんの御好意により手にすることのできた当日のテープと通訳の速記録による。なおこの談話会について、辻邦生氏が1984年5月号の『世界』に一文を寄せている。(『エミタイ』の持つ視線——アフリカがアフリカを語る時——)